磯越道なる能登瀬川

竹本　晃

はじめに

『万葉集』巻第三の三一四番歌には、波多朝臣小足が歌一首として、つぎのような歌がある。

小浪（さざれなみ）　礒越道有（いそこしぢなる）　能登湍河（のとせがは）　音之清左（おとのさやけさ）　多芸通瀬毎尓（たぎつせごとに）

［訓読文］

さざれ波　磯越道（いそこしぢ）なる　能登瀬川（のとせがわ）　音のさやけさ　激（たぎ）つ瀬ごとに[1]

この歌には、「磯越道（いそこしぢ）なる能登瀬川（のとせがわ）」という、一見わかりやすそうな地名が詠まれている。「越道（こしぢ）なる」だけに、特定できそうだが、意外にも比定地についての意見は二つに分かれている。一つは大和、もう一つは近江である。現状では、近江説が有利なようだが、それでも難点が多いことは、つとに指摘されている。

万葉歌のなかで、比定地が複数に分かれている事例は多々ある。いずれも納得できる根拠があげられていたり、または双方とも根拠薄弱で決めがたかったり、あるいは少数派の歌の解釈からくる違いなど、いくつかの類型がみられる。

今回取り上げるのは、双方とも根拠薄弱で決めがたい類型の事例である。この類型の場合、どこかに都合の悪い部分があり、やはり解決にあたっては、根拠のある別の地を想定するのが望ましい。

そこで本稿は、大和説や近江説には依らない新たな比定地を提示し、歯痒さの続く状況の打破を試みる。

一　従来の比定地の問題点

（1）大和説

「能登瀬川」の所在地について、議論の争点となっているのは、「磯越道なる」の「越」の訓みである。『類聚古集』[2]（平安末期）、西本願寺本[3]（鎌倉後期）、神宮文庫本[4]（室町後期）などの古写本類の訓には「コセ」とあり、諸注釈本類もこれらに習っていることが、大和説のかつての大きな根拠となっていた。

そして、こうした史料的な根拠に加え、契沖の『万葉代匠記』[5]（以下、『代匠記』と略す）が、初稿本では「こせちとあれはやまとのくになり」とし、精撰本においても「巨勢路ハ第一ニモ有ツ」としたように、巻第一の五〇番歌（藤原宮の役民が作る歌）の「よし巨勢道より（依巨勢道従）」の「巨勢」とみなしたことが、後世にま

で影響を及ぼし、近世近現代を通じて、長い間受け入れられてきた。

たとえば、戦前において、井上通泰『萬葉集新考』[6]では、「コセヂ巨勢路にて寧楽より巨勢にゆく道なればノトセ川は契沖の大和と定めたるぞよろしき。（中略）今の重坂（さか）川なり」とし、山田孝雄『萬葉集講義』[7]では、「「ノトセガハ」と今名づくる川はこの巨勢の地に今は聞こえず」としながらも、「然れども、巨勢の地には蘇我川の上流がありて」とあるように、井上通泰と同じく、現在の曽我川上流に「能登瀬川」を比定している。

戦後においても、武田祐吉『萬葉集全註釋』[8]や佐佐木信綱『萬葉集評釈』[9]などは、戦前の論者と同じ意見であった。

ところが、澤瀉久孝『萬葉集注釋』[10]（以下、『注釋』と略す）によって、長らく受け入れられてきた大和説に対する大きな批判が出されることとなった。

これまでの諸説は、「能登瀬川」を巨勢に比定する傍証として、「高湍なる 能登瀬の川の 後も逢はむ 妹には我は 今にあらずとも」（巻第十二の三〇一八番歌）の「高湍」が巨勢に相当するということをあげてきた。

これに対し、『注釋』は、巨勢のコは乙類で、原文「越」のコは甲類であることを指摘し、原文「越」を巨勢の「コ」とはみなせないと主張したのである。大和説にとっては、致命的な問題であり、この『注釋』の説が出されて以来、現在では、「越道」の訓み下し、ならびに諸注釈は「コシヂ」に落ち着いている[11]。

一方、写本間の訓の異なりについて、なぜ早い段階で『類聚古集』が「コセ」と訓んでいるのかは不明であるが、西本願寺本の訓の校訂注記（「コセ」の「セ」を茶薄色にし、右に「シ古」とする[12]）や神宮文庫本の重ね書きの訂正前が「コシ」であることから、史料のうえでも「コセ」より「コシ」が古いと考えられる。

また、仙覚寛元本の系統を引く写本のうち、最古にあたる神宮文庫本が「コシ」であるなら、仙覚寛元本さらには西本願寺本が参照した仙覚文永三年本の時点でも、「コシ」であった可能性が指摘できる。それに、仙覚本とは系統を異にする『古葉略類聚鈔』[13]（鎌倉初期）も、「コシ」を主訓（左傍訓に「コセ」）としていることも、「コシ」の古さを裏づけている。

なお、仙覚本を遡る紀州本[14]（鎌倉末期）も「コセ」の訓をとっていない。本文は「越」ではなく「超」とし、「コエ」と訓むが、このことは、少なくとも仙覚以前に「コセ」が主流ではなかったことを示す傍証にはなるだろう。

したがって、「磯越道（いそこしぢ）なる」と訓む『注釋』の説は、当を得ていると思われる。では、「磯越道（いそこしぢ）なる」でよければ、大和の巨勢ではなくどこになるのであろうか。冒頭にも記したように、『注釋』があげた候補地は近江であった。

『注釋』は、「磯越道（いそこしぢ）なる 能登瀬川（のとせがわ）」を近江とし、滋賀県米原市

能登瀬を流れる天野川を故地とみた。この想定が妥当であるかをつぎに検討する。

（2）近江説

『注釋』の近江説は、江戸時代後期の随筆である、伴蒿蹊『閑田耕筆』（一八〇一）のなかの記載に根拠を求めている。その巻一に、「近江坂田郡番場駅より八丁北に、能登瀬村、のとせ川あり。（中略）此歌のごとく、今もあまた所に滝落ていさぎよし」[15]と、百如律師という人物が、『万葉集』巻第三の三一四番歌を引用して述べていることに注目した。

伴蒿蹊自身は、百如律師の話を引用しながらも、『代匠記』の大和説にしたがったが、『注釋』は同じ話から、この能登瀬村を流れる現在の天野川こそ、三一四番歌の「能登瀬川」とみたのである[16]。

『注釋』の考えでは、現米原市の能登瀬の地は、美濃から北陸へ向かう通路にあたり、そこを越道と呼んでもおかしくないという[17]。たしかに全否定はできまい。『注釋』はとくに述べていないが、『万葉集』のなかには、琵琶湖の湖東から湖北にかけての地域を詠んだ歌もある。若湯坐王の歌一首としてあがる巻第三の三五二番歌の「津乎の崎」（滋賀県長浜市湖北町[18]）や、「笠朝臣金村が、伊香山にして作る歌二首」（巻第八の一五三二・一五三三番歌の題詞）としてあがる「伊香山」（長浜市木之本町）などである。

ところが、これらの歌については、湖北あるいは越前に行くにあたり、湖東経由で北上したと考えるよりも、どちらかと言えば、湖北と湖西との水上交通上の結びつきから捉えた方が無難であろう。

「小弁の歌一首」としてあがる巻第九の一七三四番歌には、「高島の 阿渡の湊を 漕ぎすぎて 塩津菅浦 今か漕ぐらむ」とあり、湖西にあるいずれかの津から、阿渡の湊を通り過ぎて、塩津や菅浦に渡っている船の様子が詠まれている[19]。これは日常的な交通の叙景と考えてよいであろう。

そして、巻第三の三六五番歌には、「笠朝臣金村が塩津山にして作る歌」として、「塩津山 うち越え行けば 我が乗れる 馬そつまづく 家恋ふらしも」とあるが、笠金村は、美濃方面ではなく、都から来ているはずであるから、大津あるいは湖西のいずれかの湊から、船で塩津まで渡ってきたと思われる。その船上から、塩津近辺にある伊香山を眺めつつ上陸し、塩津山を越えて越前の敦賀に抜けたのだろう。なお、この山越えは、奈良時代の官道ではない深坂越が想定されている。

このように、いくつかの事例を勘案してみると、湖北の東寄りの地には、湖東から来たのではなく、湖西から水上交通を使って渡って、近辺を巡ったと考えるのがもっとも整合的である。

そもそも北陸道（越道）と言えば、ふつうは琵琶湖の湖西路を指す。平城京から考えれば、当然であろう。やはりこの点が、「能登

瀬川」近江説の大きな弱点となってしまう。

『注釋』の近江説を紹介しつつも、「能登瀬川」の比定地を所在未詳とする『全集』『大系』は、やはり北陸道であるはずの「越道」が、湖東を指すと考えることに疑問があるのであろう[20]。

また、別の視点から、「能登瀬川」近江説を否定する説がある。それは、現在の天野川が古代の「息長川」に相当するという理由からの否定である[21]。『万葉集』での「息長川」は、天平勝宝八歳（七五六）三月七日に、聖武太上天皇・孝謙天皇・光明皇太后の行幸の途中、河内国伎人郷の馬国人の家で催された宴で、馬国人が詠んだ「にほ鳥の　息長川は　絶えぬとも　君に語らむ　言尽きめやも〈古新未詳なり〉」（巻第二十の四四五八番歌）にみえる。

『日本書紀』の壬申紀[22]において、村国連男依らが不破方面から数万の兵を率いて大津を目指した時、近江に入って最初に激戦した地も「息長の横河」であった。周辺には、横川駅や横川頓宮があったと考えられている。

したがって、湖東路を「越道」と呼ぶことの疑問と、「息長川」を現天野川とみることの蓋然性の高さが、「能登瀬川」を近江とすることを躊躇わせているのであろう。

では、近江説でもないとすれば、いったい「能登瀬川」とはどこを流れる川を指すのであろうか。それについては、やはり「越道」の検討に戻らなければならない。

二　越道の範囲

（1）交通路としての越道

巻第三の三一四番歌の「越道有」は、「コシヂナル」と訓み、『注釋』の通り、ふつうは「越の国への道にある」と解釈されている。つまり、都から越前国への途上という意である。そこで、まず問題となるのは、越前国への途上とはどこなのかということであろう。

平城京から琵琶湖の湖南までの道のりは、いろいろ議論があるので省略するが、山背国を通って、大津付近から湖西路をとるコースが、いわゆる越道である北陸道を指す。そして、湖西を北上し、西近江路から追分や疋田を越えて、越前国の敦賀に抜けると考えるのが一般的である。越前に抜ける前に、三関の一つの愛発関もある。

こうした通説に則れば、「越道なる能登瀬川」は、右にみた途上であるから、山背国か近江国内を通る北陸道の沿道ということになる。だが、現在のところ、山背や近江（湖西）に能登瀬川らしき地名は見つからない。見つからないからこそ、湖東の天野川説が出されたのであろう。『注釋』の天野川説も、じつは断定ではなく、ほかに候補がなければという条件つきで掲げられたものであった。

しかしながら、近年になって、北陸道の新たなルートが提唱され、この問題に光を投げかけたのである。それは、近江から越前に抜けるルートを見直し、近江から若狭経由で越前に向かうルートこそが

奈良時代の北陸道だったという説である。[23]

『延喜式』兵部省・諸国駅伝馬条によれば、近江国の穴多駅・和爾駅・三尾駅を経て、鞆結駅から山越えして、越前国の松原駅に至る西近江路が北陸道と考えられ、北陸道の通説的見解であったが、じつはこの道が駅路として整備されたのは、奈良時代のことではないという。[24]

足利健亮・金田章裕・舘野和己氏らは、『延喜式』にみえる西近江路ではなく、これまで支路と考えられてきた近江から若狭への分岐路を北陸道の本道とみたのである。その傍証として、足利氏は、坂上大嬢が大伴家持に贈った万葉歌に、「若狭道の 後瀬の山」（巻第四の七三七番歌）が詠みこまれていることなどをあげる。

後瀬山は、若狭国府の近くにあたる現在の小浜駅付近の山に比定されており、その地はもちろん若狭であるから、そのあたりの北陸道を若狭道と呼ぶことになんら問題はない。

むしろ、本稿において重要なのは、奈良時代の北陸道が若狭経由であるとすると、近江の湖西のみならず、若狭国内も「越道」の範疇に入るという点である。したがって、若狭国が「越道なる能登瀬川」の候補地として、新たに加えられたのである。

（2）『万葉集』における「越道」

では、『万葉集』における「越道」が、若狭を含めても整合性がとれるかをつぎに検討する。『万葉集』のなかで、「越道」が詠まれている三首のうち、まず一つは笠朝臣金村関係歌である。

神亀五年戊辰の秋八月の歌一首 并せて短歌

人となる ことは難きを わくらばに なれる我が身は 死にも生きも 君がまにまと 思ひつつ ありし間に うつせみの 世の人なれば 大君の 命畏み 天離る 鄙治めにと 朝鳥の 朝立ちしつつ 群鳥の 群立ち去なば 留まり居て 我れは恋ひむな 見ず久ならば

（巻第九の一七八五番歌）

反歌

み越路の 雪降る山を 越えむ日は 留まれる我を かけて偲はせ

（**三越道之** 雪零山乎 将越日者 留有吾乎 懸而小竹葉背）

（巻第九の一七八六番歌）

この長歌と反歌は、題詞にもあるように、神亀五年（七二八）に作られた歌である。長歌では、旅立っていく「君」を送り出す一方で、残された自分は、長い間逢えないことを愁いており、反歌でも同じく、残された自分を気にかけて偲んでくださいと、別れを悲しむ心情が詠まれている。「君」に対して、「我れは恋ひむな」であるから、女性の立場で詠まれた両歌である。

旅立つ「君」がどこに行くかは、題詞からうかがえないが、反歌に「み越路」とあがることから、越前方面であると考えられている。そのため、笠金村が作ったほかの湖北・越前関係の歌[25]（伊香山・塩津山・角鹿の津など）と一連で捉えられてきた。それらは梶川信行氏によって、「金村の越道望郷歌群」と名付けられた[26]。

梶川説のとおり、これらの歌群がひとまとまりであれば、第一章でもふれたように、湖北の伊香山と塩津のあるあたりから、深坂越で角鹿へ抜ける山越えとなり、若狭は通らない。となれば、反歌（一七八五番歌）の「み越路」に、若狭は含まれないことになりかねない。

しかし、この梶川説に対して、井之口史氏による的確な批判がある[27]。巻の歌の配列から考えられる作歌年代および歌の表現上[28]から、「金村の越道望郷歌群」を一連とはし難いことを述べ、そもそも金村と石上乙麻呂が同行したという定説を見直すべきであるとする。

「金村の越道望郷歌群」のうち、冒頭にあげた神亀五年とある以外の歌には年紀がない。梶川氏が一連と見なした根拠は、巻第九の一七八五番歌の反歌（一七八六番歌）と、年紀のない「塩津山にして作る歌二首」のうち、二首目（巻第三の三六五番歌）の語句に関連性があるとみたことによる。

み越路の 雪降る山を 越えむ日は 留まれる我を かけて偲はせ

（巻第九の一七八六番歌）

塩津山 うち越え行けば 我が乗れる 馬そつまづく 家恋ふらしも

（巻第三の三六五番歌）

たしかに「越えむ日は」と「うち越え行けば」は、語句のうえでは対応しているようにみえる。さらに梶川氏は、一七八六番歌があるために、三六五番歌をうたわなければならなかったとまで言及している。

ならば、なぜまったく異なる巻と題に分けられたのだろうかという初歩的な疑問がもちあがる。巻第八の伊香山の歌（一五三二・一五三三番歌）については、「萩」「尾花」などの景物が詠まれているためであると説明し、またそれぞれ『万葉集』の編纂方針が原因であると言うが、右の両歌の関係については、語句の関連性以外に言及がない。ここは無難に、長歌と反歌の結びつきで完結していると考えた方がよいのではないだろうか。

長歌では、別れを惜しむ女性が、恋い焦がれて苦しくなる近い将来を想像しつつ、公務だからと仕方なく見送り、反歌において、秋八月（題詞）とは季節感の異なる「み越路の 雪降る山」からうたい出すことにより、境界性を強調し、山越えの前に自分のことを思い出してほしいと願っている。これで十分完結しているのではないだろうか。

このように考えると、巻第九の長歌・反歌は、「金村の越道望郷

歌群」には含められないという結論に至る。そうすれば、反歌の「み越路」も、湖北から越前の敦賀に抜ける道とは言えず、若狭を経由した奈良時代当時の北陸道を想定できるだろう。

つぎに「越道」と詠まれた第二首は、「中臣朝臣宅守、上道して作る歌」四首のうちの第四首目にあたる。

恐みと告らずありしを　み越路の　手向けに立ちて　妹が名告りつ

（巻第十五の三七三〇番歌）

（加思故美等　能良受安里思乎　美故之治能　多武気尓多知弖　伊毛我名能里都）

この歌は、巻第十五の後半部に置かれている中臣宅守と狭野弟上娘子との贈答歌群六十三首のうちの一首である。巻第十五の目録の題[29]にあるように、中臣宅守が狭野弟上娘子と結婚した矢先に、宅守の越前国への配流の勅が下り、宅守が流刑地に向かう時、あるいは流刑地において、都にいる狭野弟上娘子と交わした贈答歌が分割して収められている。

歌群の構成については、いくつかの捉え方があるが、題詞をもつ最初の「別れに臨みて娘子が悲嘆して作る歌四首」（三七二三～三七二六番歌）とつぎの「中臣朝臣宅守、上道して作る歌四首」（三七二七～三七三〇番歌）が対応関係にあることは、少なくとも一致している。

「み越路」の句が入る三七三〇番歌は、流刑地に向かう旅の途中の歌である。越へ向かう道中の峠において、とうとう隠していたあなた（狭野弟上娘子）の名を峠の神に言ってしまったとの内容で、いわゆる交通の難所を意味している。「越路」の道中には、旅の安全を左右するような険しい峠越えがあったようである。

では、この「手向け」の場所は、いったいどこを指しているのだろうか。宅守は、越前国の味真野にいるらしい（三七七〇番歌）。都から越路を通って味真野へ行く道には、大和と山背、山背と近江の国境、そして越への国境などいくつかある。吉井巌氏は、軍事的性格の強い愛発関ではなく、大化の畿内の北限にあたる、山背近江国境付近の「逢坂山」であると指摘する[30]。

宅守が現地についてからの二人の歌をみてみると、二人の間にある障壁として、「山川を中に隔りて[31]」（三七五五・三七六四番歌）がもっともよく表していると思うが、ほかに「遠き山　関」（三七三四番歌）、「関山」（三七五七番歌）、「過所なしに　関」（三七五四番歌）、そして、具体名で「逢坂山」（三七六二番歌）があがる。

ここは、いくつもの障壁という意味で、漠然と関や山を指しているのかもしれないが、山として具体名があがっているので、やはり「逢坂山」とみるのが適当であろう。

「我妹子に　逢坂山を　越えて来て　泣きつつ居れど　逢ふよしもなし」（巻第十五の三七六二番歌）の「我妹子に逢ふ逢坂山」とかけているわけだが、この歌群六十三首のうち、流刑地に着いてからの五十五首のなかで、じつに十三首も「逢ふ」が詠まれている[32]。宅守も狭野弟上娘子も、二人の障壁となるものをある程度想定して詠んでいたのではないだろうか[33]。

以上述べてきたなかで、三七四〇番歌の「み越路」は、「逢坂山」を越えて湖西路を進んだ、というところまでしかわからないにしても、若狭経由の北陸道に不利な要素はなかったと言える。

つぎに「越道」と詠まれた第三首目は、坂上郎女の詠んだ「京師より来贈せたる歌一首」で、娘の坂上大嬢に贈った歌である。

海神の　神の命の　み櫛笥に　貯ひ置きて　斎くとふ　玉にまさりて　思へりし　我が子にはあれど　うつせみの　世の理と　ますらをの　引きのまにまに　しなざかる　越路をさして　延ふつたの　別れにしより　沖つ波　撓む眉引き　大船の　ゆくらゆくらに　面影に　もとな見えつつ　かく恋ひば　老い付く我が身　けだし堪へむかも　（巻第十九の四二二〇番歌）

右の歌は、坂上大嬢が以前贈った歌（巻第十九の四一六九・四一七〇番歌）への返歌であると言われている。坂上大嬢は、天平勝宝元年頃に、大帳使として上京していた大伴家持の帰任（越中国司）に伴って、都から離れた[34]。その愛娘に向けた坂上郎女による長歌である。

ここで言う「越路」は、坂上郎女による都からの視点である。具体的な景物を詠んだわけでもなく、ただ漠然と京から越中までの道のりとして「越路」の語句が使われている。「しなざかる」であるから、その道のりに、遠く山々が重なっている様子を想像することができる。そうであれば、都の近辺というより、もう少し越中寄りの北陸道を想定して詠んでいるのであろう。

いずれにせよ、この歌の「越路」についても、若狭経由であることを否定する材料はどこにもなく、若狭から北陸に入る北陸道をイメージして詠まれたと考えても大過ないであろう。

三　若狭国の能登瀬川

前章までにおいて、北陸道である「越道」を検討することによって、「さざれ波　磯越道なる　能登瀬川　音のさやけさ　激つ瀬ごとに」（『万葉集』巻第三の三一四番歌）の「磯越道なる能登瀬川」を、大和でも近江でもなく、若狭にまで広げられる可能性を示した。そこで、手がかりをつかむため、まずは『和名抄』を確認する。

『和名抄』の若狭国には、遠敷郡・三方郡の二郡がある。遠敷郡

は、平安前期になると、大飯郡が分立するので、奈良時代の若狭国は二郡、平安時代は三郡構成である。

そして、遠敷郡には、遠敷・丹生・玉置・安賀・野里・志麻・余戸・神戸の八郷があり、大飯郡には、大飯・佐文・木津・阿遠の四郷がある[35]。三方郡には、能登・弥美・三方・余戸・駅家郷の五郷があり[36]、このほか、平安期の『和名抄』段階にはみられなくなる竹田郷が、早い時期の木簡から確認されている。

このなかで、「磯越道なる能登瀬川」に関連しそうな地名をあげるなら、やはり三方郡能登郷であろう。そこで、つぎに三方郡にしぼって、奈良時代の行政単位名を復元する。

奈良時代以前の一次史料を整理すると、能登郷（乃止郷）は田名遺跡（三方上中郡若狭町田名）からの出土木簡に「三方郡能登里[37]」、弥美郷は「三方評耳五十戸[38]」（藤原宮跡出土）、三方郷は「三形評三形五十戸[39]」（飛鳥京跡出土）、竹田郷は「三方評竹田部里[40]」（藤原宮跡出土）、余戸郷は「三方郡餘戸[41]」（藤原宮跡出土）と書かれた木簡が出土している。

早いものでは、弥美と三方が七世紀後半の五十戸制下、竹田は七世紀末の評制下から確認でき、能登・余戸は八世紀初頭の里制下、つまり大宝令制下において確実にあったと考えられる。このようにみると、奈良時代の三方郡には、能登・弥美・三方・竹田・余戸の五郷があったということがわかる。

それぞれの郷域について、弥美郷が三方郡美浜町の耳川流域、三方郷が現在の三方上中郡若狭町三方を中心とする地域であることは動かない。能登郷は、同郡若狭町能登野一帯から倉見峠にかけての地域に想定されており、竹田・余戸郷不明である。

能登郷のなかには、能登神社の存在が『延喜式』の記載[42]によって知られる。中世には「能登野」と呼ばれ、「能登(野)」の名称は、奈良時代から現在まで受け継がれてきたと言える。

ところで、三方郡の三方郷・能登郷は、おもに三十三間山を源流とする鰣（はす）川水系によって形成された、南北に細長い沖積地に位置している（図1）。この沖積地を南に向かうと、高度をあげながら東西の幅を狭め、最後は倉見峠へと至る。三十三間山から流れる鰣川は、倉見峠を少し北に下った倉見の集落から、低地部に抜けて北流し、東からの八幡川や西からの高瀬川などのいくつかの支流と合流しながら、鳥浜を通って、三方五湖の三方湖に注いでいる。

三方や能登野の中心部は、南北に細長い低地のなかでも、空間的にやや開けた場所にある。ちょうど西側は、丘陵部の谷が奥まで入り込んでおり、視覚的にも圧迫感が少ない。

こうした三方低地と呼ばれる狭い地域なかに、現在は、鰣川・JR小浜線・国道二十七号線が南北を貫いている。したがって、奈良時代当時も、鰣川と北陸道が、この狭いなかを平行して走っていたことはまちがいない。北陸道は、三方の北側の中山や気山あたりの

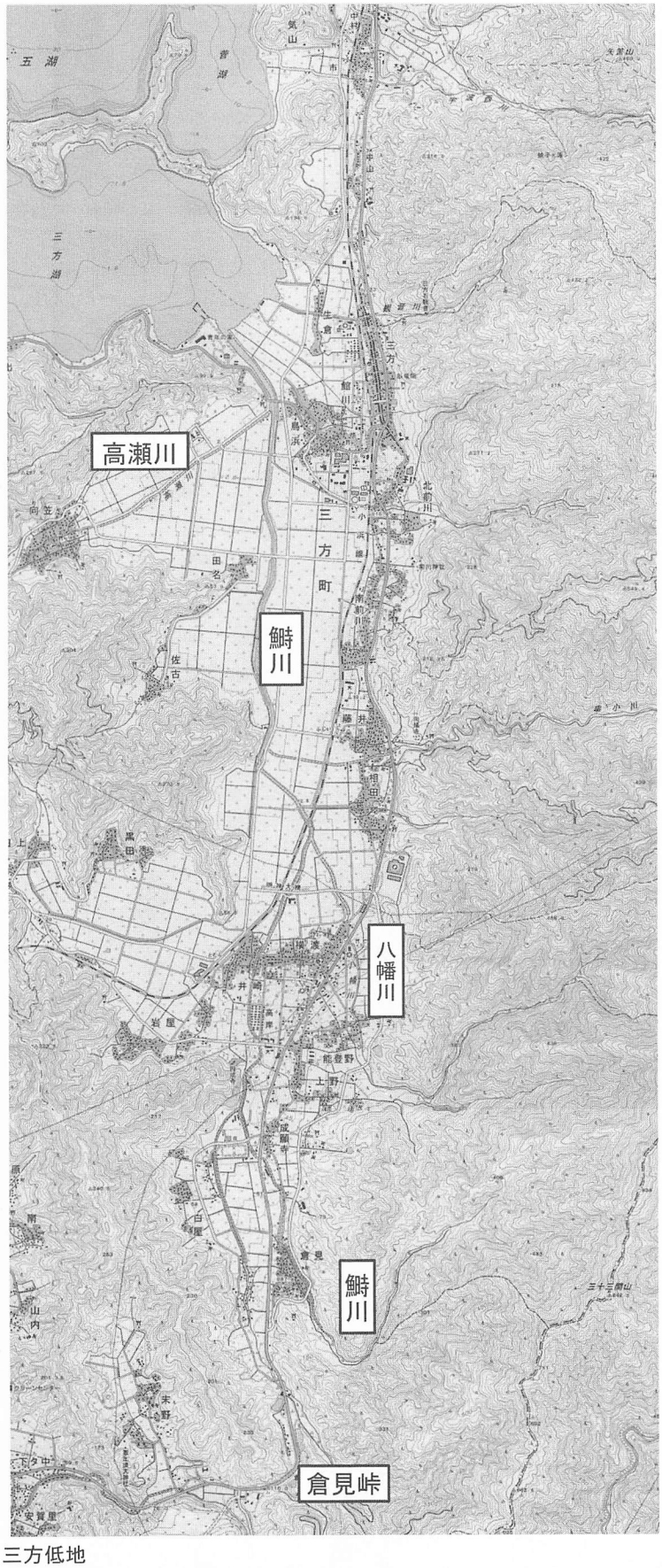

図１　三方低地
（国土地理院編「二万五千分の一地形図〔三方・熊川〕」を 1/60 に縮小し、一部加筆

狭窄部を通るしかないからである。

三方低地の北陸道は、まだ考古学的にも明らかにされていない。中山の狭窄部を通るとなれば、だいたいルートを想定できるが、確かなことはわからない。だが、現在の国道や旧道ならびに集落が低地の東麓に沿っているように、道は今とそれほど外れることはないであろう。

ただし、鰣川については、東西の位置が部分的に動いている可能性がある。とくに能登野周辺の鰣川本流と支流の八幡川が集落を通過するあたりを、地形図や空中写真でみると、かなり乱れているのがよくわかる。集落内を走る旧道も含めた不自然な角度の道は、おそらく旧流路と考えてよいだろう。

現状の情報では、奈良時代の状態を復元するまでには至らないが、いくつかの段階を経て、現在の流路に落ち着いたとみるべきである。

このように、三方低地における地形を概観したうえで、つぎに万葉歌との関係を考えたい。「能登瀬川」は、『万葉集』のなかで二首詠まれている。

①さざれ波 磯越道なる 能登瀬川 音のさやけさ 激つ瀬ごとに
（巻第三の三一四番歌）

②高湍なる 能登瀬の川の 後も逢はむ 妹には我は 今にあらずとも
（巻第十二の三〇一八番歌）

（高湍尓有 能登瀬乃川之 後将合 妹者吾者 今尓不有十方）

①の冒頭「さざれ波 磯」までが、「越道」を起こす序と考えられている。「さざれ波が磯を越していく」という意である。さざれ波は、小さな波が何度も繰り返し訪れるというところから、連続性や不変性をイメージさせる。そうした特徴から、『万葉集』では、恋の歌に用いられることがよくある。「千鳥鳴く 佐保の川瀬の さざれ波 止む時もなし 我が恋ふらくは」（巻第四の五二六番歌）や「との曇り 雨ふる川の さざれ波 間なくも君は 思ほゆるかも」（巻第十二の三〇一二番歌）のように、相手を思う気持ちが絶えることがないと詠まれている。

一方で、実景らしき状態を詠んだ「さざれ波 浮きて流るる 泊瀬川 寄るべき磯の なきがさぶしさ」（巻第十三の三二二六番歌）もあり、この歌の様子が①に近い。泊瀬川は、急流であるため、岩などにぶつかってさざ波が立つのであろう[43]。

「能登瀬川」も同じような状況が考えられる。第五句に「激つ瀬ごとに」とあるからである。急流である「能登瀬川」が、いくつかの箇所で小規模な滝を形成し、その余波がさざれ波として見えるのであろう。そしてまた、その音がすがすがしいという。

こうしてみると、①の歌には、一定の時間の流れが感じられる。「激つ瀬ごとに」であるから、「能登瀬川」に沿って、視覚と聴覚

で感じながら、時も場所も進んでいる様子が目に浮かんでくる。

先に述べたように、三方郷や能登郷は、南北に細長い低地に位置している。さらに、鰐川水系と北陸道は併走している[44]。そう考えれば、①は、三方低地ならではの地形状況に、ひじょうに合致している。鰐川水系こそが、「能登瀬川」ではないだろうか。

さて、②には、「高湍なる 能登瀬の川」とある。「後も逢はむ」の「ノチ」を導く序として、「ノトセ川」が使われている。②の類歌として、「鴨川の 後瀬静けく 後も逢はむ 妹には我れは 今ならずとも」（巻第十一の二四三一番歌）がある。ここでは「ノチ」を起こす序として、「鴨川の 後瀬」（障害のない下流の瀬）が用いられている。

地名を入れ替えて、歌が詠まれるような類歌であるなら、ある程度著名な地名でなければならない。「若狭道の 後瀬の山」（巻第四の七三七番歌）もそうである。とすれば、北陸道にある「能登瀬川」も著名な部類に入るのかもしれない。

そして、②の「能登瀬川」には、「高湍なる」が冠せられている。「高湍なる」が、「高瀬」という地名か「高い瀬」かによって、考え方は異なるであろう。地名であれば、先ほど想定した鰐川水系に「高瀬」という地名がなければならない。

たとえば、鳥浜の西方の向笠方面から流れてくる川を高瀬川と呼んでいる。そして高瀬川と鰐川が合流する付近の小字名にも「高瀬」とある[45]。合流した現在の両河川は、そこから三方湖へ注いでいる[46]。この「高瀬」の名称が、いつまで遡るのか不明であるが、三方低地に「高瀬」という地名があるのは、やはり見過ごせない。地名は、時代の推移に伴い、範囲が変わったり、転化することがある。そのため、「高瀬」という地域名が、このあたりに広がっていた可能性も想定しておくべきであろう。

一方の「高い瀬」であるとすれば、①に「激つ瀬ごとに」とあるのが注目される。たとえば、倉見の集落で標高が九十メートル近くある。そこから北に川と併走していくと、三方の山麓部では標高二十メートル前後であるが、低地の鳥浜付近では標高十メートル前後にまで落ちる。鰐川の上流から中流にかけては、かなりの勾配があるとみてよい。したがって、鰐川は、浅くて流れの速い川であるから、「高い瀬である能登瀬川」と捉えても、十分あてはまるのである。

むすびにかえて

以上のように、『万葉集』巻第三の三一四番歌の「磯越道なる 能登瀬川」の比定を試みた。北陸道が若狭経由であるという説をふまえると、大和（巨勢）や近江（湖東）以外の地に、「能登瀬川」の候補地を得ることができた。

若狭国三方郡能登郷（現在の能登野）および三方郷一帯は、三方低地と呼ばれる狭小な地形をなし、ちょうどそこに北陸道が通っていたこと、しかも、七、八キロメートルにわたって鰣川と併走する、ほかに見ない地形環境であった。それゆえに、『万葉集』に詠まれるほど、名が知られることとなったのであろう。おそらくその背後には、鰣川や北陸道の先に見えている「若狭なる三方の海」（巻第七の一一七七番歌）の存在も大きかったと思われる。

しかしながら、古代の「能登瀬川」が、鰣川と呼ばれるようになったいきさつや、高瀬川という名称がいつまで遡るのかなど、追い切れなかったという、不十分な点もある。それらの点は、今後の課題としたい。

［注］

（1）『万葉集』の原文および訓読文は、とくに断りのない限り、小島憲之ほか校注・訳『萬葉集①～④〈全四冊〉』新編日本古典文学全集6～9（小学館、一九九四～一九九六年）を参照した。以下、『全集』と略す。

（2）龍谷大学仏教文化研究所編『類聚古集 影印・翻刻篇 上』（思文閣出版、二〇〇〇年）。

（3）主婦の友社編（林勉監修）『西本願寺本萬葉集（普及版）』巻第三（おうふう、一九九三年）。

（4）林勉解説『神宮文庫本万葉集一（巻第一－巻第五）』（勉誠社、一九七七年）。

（5）久松潜一監修・築島裕ほか編『契沖全集』第二巻、萬葉代匠記二（岩波書店、一九七三年）。

（6）井上通泰『萬葉集新考』第一（国民図書株式会社、一九二八年）。

（7）山田孝雄『萬葉集講義』巻第三（寶文館、一九三七年）。

（8）武田祐吉『増訂萬葉集全註釋』四〔巻の3〕（角川書店、一九五七年）。

（9）佐佐木信綱『萬葉集評釈』巻一（六興出版部、一九五八年）。

（10）澤瀉久孝『萬葉集注釋 巻第三』（中央公論社、一九五八年）。以下、澤瀉氏の見解は、すべてこれによる。

（11）青木生子ほか校注『萬葉集一』新潮日本古典集成（新潮社、一九七六年）、西宮一民『萬葉集全注』巻第三、有斐閣、一九八四年（以下、『西宮全注』と略す）、『全集』、佐竹昭広ほか校注『萬葉集一』新日本古典文学大系1、岩波書店、一九九九年（以下、『大系』と略す）など。

（12）築島裕『西本願寺本萬葉集解説』（主婦の友社、一九八四年）、山崎福之「西本願寺本萬葉集の古本注記と訓読」『日本古典文学会々報』第一一三号、一九八七年。

（13）佐々木信綱編『古葉略類聚鈔』三（一九二三年）巻第十・河。

（14）『紀州本萬葉集』（財團法人後藤安報恩會、一九四一年）。

（15）伴蒿蹊『閑田耕筆』巻第一（『日本随筆大成〈第一期〉18』吉川弘文館、一九七六年）。

（16）注（6）『萬葉集新考』では、百如律師の話を紹介しながらも、近江説を否定し、大和説をとっている。

(17) 『西宮全注』も『注釋』説を支持している。
(18) 『代匠記』、広岡義隆『万葉の歌—人と風土—⑧滋賀』（保育社、一九八六年）。
(19) 「近江の海 湊は八十ち いづくにか 君が船泊て 草結びけむ」（巻第七の一一六九番歌）と詠まれるごとく、多くの湊があったが、湖西と湖北の湊が主流であったことは言うまでもない。
(20) 伊藤博『萬葉集釋注 二』（集英社、一九九六年）、中西進『万葉集（一） 全訳注原文付』（講談社、一九七八年）、同編『万葉集事典 万葉集 全訳注原文付 別巻』（講談社、一九八五年）も同じ。
(21) 広岡義隆『万葉の歌—人と風土—⑧滋賀』（保育社、一九八六年）。
(22) 『日本書紀』天武元年（六七二）七月丙申条。
(23) 足利健亮「古北陸道の変遷と条里遺構」（志賀町史編集委員会編『志賀町史』第一巻、一九九六年）、金田章裕「古道と条里」（今津町史編集委員会編『今津町史』第一巻、古代・中世、一九九七年）、舘野和己「古代越前国と愛発関」『福井県文書館研究紀要』第三号、二〇〇六年。以下、三者の見解はすべてこれらによる。
(24) 舘野氏は、延暦十四年（七九五）の近江若狭における駅路の改変こそが、北陸道における若狭経由から西近江路への変更であるとみる。
(25) 『万葉集』巻第八の一五三二・一五三三番歌、巻第三の三六四～三六九番歌。
(26) 梶川信行「越道の望郷歌群」（『万葉史の論 笠金村』桜楓社、一九八七年、初出は一九八一年）。梶川説は、すべてこれによる。
(27) 井之口史「金村の巻九・相聞長歌二首」（神野志隆光・坂本信幸編『セミナー万葉の歌人と作品 第六巻 笠金村・車持千年・田辺福麻呂』和泉書院、二〇〇〇年）。以下、井之口説は、すべてこれによる。
(28) 長歌について、「望郷の思いを予想した上になる趣向」とする梶川説に対し、「宿命的な別れそのものへの哀感が漂う歌」であると述べる。
(29) 目録には「中臣朝臣宅守、蔵部の女孺狭野弟上娘子を娶りし時に、勅して流罪に断じ越前国に配す。ここに夫婦別れ易く会い難きことを相嘆きて、各慟む情を陳べ、贈答せる歌六十三首」というまとまった題が載せられている。
(30) 吉井巌『萬葉集全注』巻第十五（有斐閣、一九八八年）。
(31) 鈴木武晴「狭野弟上娘子の贈答歌群の構成」（神野志隆光・坂本信幸編『セミナー万葉の歌人と作品 第十巻 大伴坂上郎女 後期万葉の女性歌人たち』和泉書院、二〇〇四年）は、「山水」という物理的障碍を凝視しつつ、「花」「鳥」とを通して情を抒べる「山水花鳥」の視点による構成が重ねられているとみる。
(32) 巻第十五の三七三一・三七三四・三七四〇・三七四一・三七四二・三七四五・三七五一・三七五三・三七六二・三七六九・三七七五・三七七七・三七七八番歌。
(33) 愛発関については、諸説あるので論じがたいが、北陸道若狭経由説をとる足利説（注23）によれば、若狭越前国境の越前側に位置するという。
(34) 小野寛「大伴家持の生涯」（久松潜一監修『萬葉集講座』第六巻、作家と作品Ⅱ、有精堂出版、一九七二年）。
(35) 福井県編『福井県史』通史編1、原始・古代（一九九一年）、第四章第一節。
(36) 注（35）。

(37) 福井県三方町教育委員会編『田名遺跡』（一九八八年）、田辺常博「福井・田名遺跡」（木簡学会編『木簡研究』第九号、一九八七年）など。

(38) 奈良県教育委員会編『藤原宮―国道１６５線バイパスに伴う宮域調査―』（一九六九年）、２３号木簡、奈良文化財研究所編『評制下荷札木簡集成』（東京大学出版会、二〇〇六年）、１３２号木簡。

(39) 和田萃・鶴見泰寿「飛鳥京跡第一三一次調査出土木簡概報」（奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報一九九五年度(第２分冊)』一九九六年）、８号木簡。

(40) 奈良文化財研究所編『藤原宮木簡三』（八木書店、二〇一二年）、一一七〇号木簡など。

(41) 奈良県教育委員会編『藤原宮跡出土木簡概報』（一九六八年）、１８号木簡。この木簡では、郷または里が省略されているが、時期から考えて「里」であろう。

(42) 『延喜式』巻第十、神祇十、神名下。

(43) 中西進『万葉集（三）　全訳注原文付』（講談社、一九八一年）。

(44) なお、真柄甚松「都につながる北陸道」（前掲注35所収）は、能登野の隣にあたる横渡に、奈良時代の葦田駅を想定している。もしそうであれば、夜になっても、すがすがしい川の音を聞けたのかもしれない。

(45) 三方町史編集委員会編『三方町史』（一九九〇年）。

(46) 現在は、縄文遺跡として著名な鳥浜貝塚付近が、鰣川と高瀬川の合流点となっているが、これは大正から昭和にかけての河道付け替えによるものである（『日本歴史地名大系第十八巻 福井県の地名』平凡社、一九八一年）。大正以前の鰣川は、高瀬川と合流せずに、鳥浜集落内を流れており（地図資料編纂会編『正式二万分一地形図集成 関西』柏書房、二〇〇一年、三方・田井村）、その痕跡も現在の鳥浜に残っている。なお、寛文二年（一六六二）の大地震以前における三方低地の鰣川水系は、三方湖には注がず、中山・気山の狭窄部を北流していたという説がある（岡田篤正「三方五湖低地の形成過程と地殻運動」鳥浜貝塚研究グループ編『鳥浜貝塚 一九八三年度調査概報・研究成果―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査４―』福井県教育委員会・福井県立若狭民俗資料館、一九八四年、同「二万五千分の一都市圏活断層図三方断層帯とその周辺「三方」解説書」『国土地理院技術資料』Ｄ１―№６０５、二〇一二年）。

写真１　能登野から南の倉見峠を望む

写真２　三方低地（鳥浜付近の鰣川下流から南を望む）

写真３　鰣川（倉見集落の南）